▼最優秀賞受賞作品（エッセイ）

炬燵

内田　縁

銀色月が、すきとおるような寒い夜、電話の呼びりんで、はっと目が覚めた。体の真ん中へ突き刺さるように凛と響いていく。それは時々私の耳元に聞こえてくる音の幻だ。故郷の実家を空家にする日、会いたい声をつないでくれた黒い電話機を取り外し、そのまま置いてきた。もしや玄関先で鳴いているのか、闇をさすらう魂が時空を越えて電話をかけているのだろうか。紺地の綿入れに袖を通し、ゆっくりと、襖に手をかけた。私は仏壇の前に正座をして目を閉じる。

「えっ、ほんとうですか」

クリスマスケーキの赤い箱を片手で抱いたまま耳が痛くなるほど、私は受話器を耳に押しあてた。

「とりあえず下迫さんが亡くなられたことをお伝えします。警察や、市の福祉課から連絡があると思いますので」

女性は明日の夜、また連絡すると言い電話を切った。

「これから先、おいちゃんの身に何かあっても気にしないでくれ。誰にも迷惑かけない」

数年前、私に強い口調で話した叔父が亡くなった。悲しみよりも突然、電話をかけてきた山本と名乗った女性への不安が襲いかかり私は座り込んだ。

「ねえ、いつまで坐ったままでいるの。お母さん、クリスマスケーキ食べよう」

年明けに成人式を迎える娘が私の肩をさすった。

「そうだね、それからだ。クリスマスに叔父さん逝ってしまうなんて。私が小学生の時、叔父さん、クリスマスケーキ買って帰ってきたなあ」

小さなろうそくの火を灯し私はつぶやいた。ひとつの思い出が、ほの光の中でゆれた。バタークリームの白と、赤や緑の飾りをのせた大きなクリスマスケーキを自慢げに見せてくれた。若い叔父の笑顔が目に浮かんで、吹き消したろうそくの灯りと一緒に消えた。

その夜、二回目の電話が鳴った。こわごわ受話器を私は手にした。声の主は山梨県大月署の刑事だった。刑事は私の名前を確認した。

「まちがいないですか」

「はい、まちがいありません」

次に叔父と私の間柄を聞いてきた。

「はい、下迫鉄夫は私の叔父にあたります。下迫の家は娘三人、息子二人の五人兄妹です。叔父は私の母の弟です」

「そうですか。よくわかりました」

と言った。そうして再度、私が姪であることを確認した後、山梨県都留市に住んでいた叔父の鉄夫が、十二月二十五日午前九時、都留市内の病院で心不全のため死亡したと語り、

「下迫さんは独り暮らしで、二、三日前から、自宅で寝ていたそうですが、急に気分が悪くなったようです。昨日、病院に

緊急搬送されて食事ができるくらい夜は回復していたそうです。今朝亡くなられた時間に、誰もいなかったので病院から警察に連絡が入りました」

電話の向こうで事務手続きをしているかのように淡々とした刑事の声に、次はどんな言葉が出てくるのか私は、また受話器を握りしめた。

もうすぐ雪でも降るのだろうか。鈴鹿の山々から降りてくる雪おろしのような冷たい風が、古い家のすき間から入ってくる。寒い。兄妹に、さんざん世話をかけていた叔父のことだ。金銭トラブルや人間関係の、もめごとがあるかもしれない。やっかいなことにならなければよいが。それに警察は私より先に叔父の妹、真由美に連絡すべきだろう。五人だった兄妹は今や鉄夫と真由美だけが残されているのだから。ただ残念なことに一番気の合わない二人だ。

「刑事さん、横浜に叔父の妹が住んでいます。叔父にとってはただ一人残されている兄妹です。連絡されました？」

すると刑事が、小さく笑った。

「いやー、参りましたよ。下迫さんの連絡先に、横浜に住む妹さんと、あなたの住所がありました。先に妹さんへ電話を入れたんですが…」

言葉の語尾が、だんだん小さくなって聞き取れなかった。私は叔母の答えがみえてきた。

「血のつながった妹さんに、ぜひ山梨に来ていただきたいのです。一度、妹さんに連絡をしてください。あなたから説得していただけませんか」

叔母の真由美のことだ。兄と妹の確執を刑事に対してあらゆる言葉を使い、感情を爆発させたのだろう。見えない相手に刑事はどのような人間を想像したのか私は聞いてみたくもあった。刑事は黙っている私に言った。

「鉄夫さんの妹さんに連絡された後、こちらに報告をください。遅い時間でもかまいません。よろしくお願いします」

見えない相手にうなずくように私は、刑事に告げた。

「はい、わかりました。必ず連絡します」

クリスマスの夜、叔父はどこから私と、叔母を見ているのだろうか。受話器を置いてから、ふと思った。私が寄りかかった大黒柱の陰から「おいちゃんは」と、口癖になっていた声がしそうだった。

先にも書いたが叔父は五人兄妹だった。長男に生まれ、母親の反対を押し切って東京に出た。真っ暗な夜道は、とてもこわかったがカンテラの明かりを頼りに私の母が、駅まで線路つたいに歩き叔父を送って行ったと話してくれた。家出同然だったが、叔父は堂々と時々帰ってきた。帰ってくるたびに友達を招いて毎晩、焼酎を飲み刺身をつついていた。母も、実家によばれ、叔母と煮しめをこさえたりした。いつだったか母が私を連れて泊った夜、私の布団に叔父が先に寝ていたことがある。酔っぱらって布団に包まっていた。私は寝る布団が無いと大きな声で泣いた。それでも起きなかったから、よほど飲んでいたのだろう。叔父は、あちこちで散財した時代が長く続いたようだ。だが私が世間に出て働く頃、叔父は兄妹のなかでも一番上の姉に、かなりな無理を言い迷惑をかけていると母から聞いた。やがて私が結婚して鈴鹿に住んでいることを知り叔父は何度か訪ねてき

た。叔父は独身を通し故郷の言葉は使わず、標準語を使った。東京のどこに住み、どんな仕事をしているのか、わからなかった。品の良い上着を着ていたが、老いが見え隠れする叔父の姿は、かなり無理な仕事をこなしてきたような気がした。

ある日、叔父が山梨に引っ越しするから犬が飼えなくなった。世話をしてくれと言い、やたら肩幅の広いまな板のような背中をした柴犬の雌を連れてきた。

「鉄夫叔父さん、犬の名前は何？」

「ミレイだ。女の子だからな」

「いやー笑うわ、もしかして、歌手の名前とおんなじだね」

いつもより頬を赤くした叔父が少しだけ真面目な顔になった。

「おいちゃん、歌手の北原ミレイさんのファンなんだ。レコードも持っている」

「ミレイちゃんね、ふーん」

ニヤッと笑った私に

「ほんとは、別れたくない。おいちゃんの大切な身内だからな。寝る時もいっしょだったんだ。頼むから可愛がってやってくれ」

めずらしく涙を浮かべている叔父に、ははん、叔父の目にも涙か、九州男児は涙は見せないなんて言ってたけど年齢かなぁー。叔父がお土産に持ってきた人形焼きを、ひとつ口にほおばった。そして、じっと叔父を見た。

「東京に比べたら緑も多いし、車も少ないから、ミレイちゃん散歩しようなー」

まな板のような背中をしたミレイは、叔父が帰ってしまうまで、かたときも離れなかった。ミレイは夜鳴きもして私が、

「叔父さんとこに、帰りたいんだわ」

と、言うたびに、

「今度はミレイと暮らせる所に引っ越すからもう少し待ってて」

叔父は同じ言葉を繰り返した。残念だったが、ミレイの方が先に死んでしまい、お互いの願いは叶わずに終わった。私にとっては、珍しい大雪の中を、ころげるように走りまわったり、車で年末に鹿児島の実家まで帰省したミレイとの日々は、忙しく暮らす日々の陽だまりにいるようなものだった。

その間、叔父は二回目の引っ越しをして山梨県都留市に住んでいた。そして叔父の姉や、弟に先立たれ実家も誰もいなくなり空き家になっていた。

「いつかは一旗挙げて故郷、鹿児島の小さな村に帰る」

ひとつ、ふたつと積み木を重ねていくように歳を重ねても叔父の夢は、いつしか遠退くばかりだった。

「叔父さん、近所の人や親せきの人達も、叔父さんに帰って来て欲しいって話してるよ。空き家にしていると、家も朽ちてしまう」

海に近い場所に建つ叔父の実家は、浜風が雨戸を叩いた。私は、その音や満天の星空が広がる夜も子どもの頃から好きだ。電話を掛ける度に、

「叔父さん、いつになったら帰るの？」

くり返し問いかける私に嫌気がさしたのか、本を閉じてゆくように、叔父は私から遠ざかってしまった。

「おいちゃんだよ、元気か」

突然の電話に、ああ、まだ元気な声をしている良かったと心の中でつぶやいた。反面、問題抱えてるんじゃないのか。家を貸していると言う大家さんから、家賃滞納していると、連絡があったもの。

叔父の機嫌の良さは何だろう。
「叔父さん、急にどうしたの。びっくりだ」
私はガラス戸の桟を人さし指で、そっと撫でながら聞いた。
「おいちゃんさ、鹿児島には、帰らない。仕事も辞めた。これから生活保護の手続きをするから、おいちゃんとこの実家の管理は頼む。これから先は連絡しないでくれ」
私に、いくつかの言葉を残してガチャッと、受話器を置く音が最後に聞こえた。

私は過去帳を膝にのせて、一日、二日、とめくって二十五日を開ける。下迫鉄夫享年七十七歳、七七だって、叔父さんの好きな数字だ。ちょっと笑う。ごめんね。
叔父が電話をかけてきたあの日、私が故郷に連れていくと迎えに行けば叔父は、故郷の庭を歩いただろうか。ぼんぼりのようなボンタンや、甘いみかんが、叔父の目を楽しませ、胸の鼓動は、今も生きていたかもしれない。
叔父の戒名をなぞる私の手が止まる。
「独」
と、書かれた文字は叔父が孤独に耐える姿をいくつも重ねているように思えた。

私は、叔母からの電話を待っていようか、何度も迷った。叔母は、私の声を聞くなり、
「行かないわよ、鉄夫兄さんの遺体を引き取りに行くなんてまっぴら」
相変わらず、叔母は自分のことしか考えていなかった。
「真由美叔母さん、叔父さんが生きている時、何があったか知らないけど、最後なんよ」
「そりゃ、兄だからね。でも私達はひどい目にあったの。無縁仏にしてもらえばいいじゃない。せいせいするわ」
機関銃のように声を荒げて話す叔母は、しだいに大声になった。私は受話器を耳から離した。叔父も叔母も、幼い頃は貧しい生活の日々をお互いに助け合い暮らしていたはずだ。兄妹のつながっていた糸は、容赦なく押し寄せる時代の流れに絡まり、どこかでぷっつり切れてしまったのだろうか。
「じゃね、これ以上かかわりたくないの」
底冷えするような長い時間が、叔母と私の間を過ぎていった。それっきり叔母は電話にでることはなかった。

まだ足を踏み入れたことのない遺体安置室で、叔父は待っている。私は一瞬、この身を震わせた。教えてもらった番号は大月警察署へつながり、待っていてくれたかのように電話をくれた刑事がでた。
「刑事さん、申し訳ありません。叔母は行かないと言いました」
刑事の、ため息が聞こえた。
「血のつながった妹さんに、亡くなったお兄さんの遺体を拒まれるなんて」
先に電話をしたときも、ほとほと困り果ててしまったと刑事は嘆いた。
台所に準備した餅つき用の、もち米が私の頭の中をかすめた。年末恒例の我が家の行事は、いったいどうなるだろう。私は、答を口にした。
「刑事さん私が必ず叔父を迎えにいきます」
そうですか。と、安堵する刑事の声が聞こえてくると思っていた。刑事はしばらく黙っていたが、
「まず、下迫さんの遺体を引き取りに来

てください。約束してから土壇場になって来ない人が、けっこういるのです」
私は自分の心にまで確認をするように、
「はい、必ず行きます」
さらに刑事は
「最後、お骨はどこへ持って行かれますか」
思いがけない言葉を問われた私は体中が、がくがくと震えた。私は何も言えなかった。
「私達は警察で、刑事という職務にありますが、下迫さんの最後にかかわった一人の人間としても、最後まで納得できる約束がほしいのです」
誰にも看取られず息を引き取った人や、孤独死をニュースや、新聞で目にすることが増えてきた。まして叔父がそのような死に方を迎えようなどと思ってもみなかった。刑事の言葉は私の心に問い、私の体を巡ってゆく。私は強く頬を叩かれた気がした。
私は叔父の死を軽々しく受け止めていたことを刑事に深く詫びた。
「叔父の故郷に、下迫家のお墓があります。そこは、松林に囲まれています。好きだった海の近くです。叔父の両親、姉、弟も待っているでしょう」
いつもの叔父の笑顔が見えた。
「故郷のお墓に、私が納めてきます」
「これで、ひとつ荷が下ります。よかった、下迫さんが待ってらっしゃいます。必ず約束してください」
都留市の福祉課へ連絡をして、日程を決めてほしいと担当者の電話番号を刑事は教えてくれた。
静かに受話器を置いたとき、もう一度、私は頭を深く下げた。

故郷から遠く離れた山梨で、叔父は孤独を紛らわせてくれる温もりに出会い最後に会話をした人はいただろうか。叔父が亡くなって二日目、夜通し車を走らせ東名御殿場インターを降りて山梨県都留市に向かった。都留市に入る頃だった。朝焼けが冬枯れの凍てつく山を次々と燃えるような朱に染めていった。
都留市から見える富士山も、見事な朱色に染まりゆく姿を私は見ていた。そして叔父が私を待っているようで初めて涙が溢れた。
約束の時間に大月警察署で刑事は、私を待っていてくれた。遺体安置室で叔父の顔にかけられた白い布をはいだ私に、
「下迫鉄夫さん、本人でまちがいありませんか」
「はい、本人です。刑事さん、いろいろとお世話になってしまいました。ほんとうにありがとうございました」
あちらへ旅立つ叔父と、こちらにいた私をつないでくれた一人の刑事が、私の目の前に立っていた。
「かならず故郷のお墓へ」
待たせてあった霊柩車に叔父の棺をのせたとき刑事は、
「最後の確認です」
と、微笑んだ。

都留市の斎場へ霊柩車で着いた。最初に電話をくれた、山本と名乗っていた女性が待っていた。女性は私の顔を見るなり、
「下迫のおじさんにはお世話になりました。子どもたちを孫のようにかわいがってもらったんです」
深々と女性に頭を下げられ、叔父の生きてきた道は独りではなかったと気付いた。
「両親や私達家族と、こんな寒い冬の一

日は炬燵を囲んで下迫さんの話を聞きました」

また涙が溢れた。叔父はこの都留市で人生を語り、人に結ばれて温かい家族の時間の中にいたことを感じた。

新聞屋さんのバイクが、近づいて停まった。足音が今日に向かって歩く。「独生」叔父の足音も少しずつ遠ざかっていった。叔父を見送った最後の日、私は遺骨になった叔父を膝にのせた。まだ炬燵のように温かくて。